

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：17301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885058

研究課題名(和文)「証言」という語りの形成と変容 - - 長崎の原爆被害を事例として

研究課題名(英文)The Formation and Transformation of "the Testimony," A-bomb Narratives in Nagasaki

研究代表者

四條 知恵 (SHIJO, Chie)

長崎大学・核兵器廃絶研究センター・客員研究員

研究者番号：80730556

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、長崎をフィールドに「証言」という枠組みの形成と今後の変容の可能性を探るものである。戦後の長崎の証言運動を牽引してきた市民団体が発行する雑誌や会報などのデータ化により、長崎における戦後史の貴重な資料データベースを構築しつつ、原爆体験者の語りとその「継承」をめぐる問題について、語りが生まれる現場から検証を行った。

研究成果の概要(英文)：This study investigates the formation of "the survivor testimony" and the possibility of its future transformation in Nagasaki. I examined problems surrounding "the transmission" of A-bomb experiences to generations in the place where these narratives were born, while building a valuable database of postwar documents from Nagasaki by compiling data from sources such as magazines and bulletins published by a citizen's group, which sparked the testimony campaign.

研究分野：社会科学

キーワード：語り 証言 原爆 長崎

1. 研究開始当初の背景

M. アルヴァックスによる集合的記憶という概念の提唱【A】やP. ノラ編の『記憶の場』【B】などの影響を受け、戦争の記憶・表象に関する研究が進展を見せる中、原爆の記憶・表象に関する研究についても、米山リサ【C】を始めとして広島を中心に学際的な研究が蓄積されつつある。

しかし、記憶を表象する手段の一つである「語り」の中でも主要な位置を占めてきた「証言」〔戦争体験の事実を言葉で証明すること、あるいはその言葉〕に着目した研究は未だ乏しく、広島では米山リサが、長崎では近年「長崎の証言の会」を取り上げた東村岳史【D】の先行研究があげられる程度である。米山の研究は「証言」という枠組みを自明なものとして扱っており、東村の研究は、「証言」の歴史性に着目した先駆的なものであるが、原爆をめぐる言説空間の中に「証言」という語りを位置づけるという点では未だ不十分といえる。

申請者はこれまで長崎のカトリック団を対象に原爆の語りを研究し、長崎のカトリック教界においては、原爆死を神への犠牲と捉える永井隆の燔祭説の影響を受けた語りから、1980年代のローマ教皇来日を画期として、戦争を否定すべきものと捉え、原爆被害の悲惨さを語り継ぐことの意義を強調する語りが見られるようになるということを明らかにしている。この変化は、カトリック教界のみならず、長崎の原爆被害をめぐる言説空間全体の変化とあいまってもたらされたものであり、それには、1968年以降40年に亘って原爆体験を収集、出版してきた『長崎の証言の会』の活動の影響があると推測する。『長崎の証言の会』は、長崎における証言運動を牽引し、広島には見られない長崎独自の運動拠点として存在感を放ってきたが、戦後70年を経た現在、会員の高齢化が進み、その足跡は原爆被害を扱う研究者

の間においても埋没しつつある。

「証言」と括られる対象は、記述から口述まで幅広いが、その一つに、被爆者が直接原爆体験を語る「被爆体験講話」*がある。長崎原爆資料館には2012年度現在、約64万3千人の来館者があり、このうち修学旅行生を中心とした17万2,911人が財団法人長崎平和推進協会所属の被爆者(36人)の「被爆体験講話」を受けている。このように被爆体験講話は、組織化された原爆体験「証言」の支配的な「語り」【E】を提供している。

しかしながら、被爆体験講話により多くの人々に原爆体験を当事者から聞く貴重な機会が与えられてきた一方で、切り取られた時空間の中で一方的に「大切」な体験を拝聴するというこの制度は、画一的で様式化した特殊な語りの形態を形作ることにもなったのではないかと推測される。

* 被爆体験証言、平和学習、修学講習などともいう。

- 【A】Halbwachs, Maurice., 1950, *La mémoire collective* (= 1989、小関藤一郎『集合的記憶』行路社)
- 【B】Nora, Pierre., 1996, "From *Lieux de mémoire* to *Realms of Memory*," *Realms of Memory: Rethinking the French Past*: Columbia University Press. (= 2002、『記憶の場 *Lieux de mémoire*』から『記憶の領域へ *Realms of Memory*』谷川稔訳『記憶の場 フランス国民意識の文化 = 社会史 1』、岩波書店)ほか
- 【C】Yoneyama, Lisa., 1999, *Hiroshima Traces: Time, Space, and the Dialectics of Memory*, University of California Press. (= 2005、小沢弘明・小澤祥子・小田島勝浩訳『広島 記憶のポリテイクス』岩波書店)
- 【D】東村岳史、2012、『生活記録』から『証言』へ 『長崎証言の会』創設期と鎌田定夫、『原爆文学研究』11
- 【E】蘭信三、2008、『戦後日本社会と満州移民体験の語り継ぎ』浜日出夫編『戦後日本における市民意識の形成 戦争体験の世代間継承』慶應義塾大学出版会

2. 研究の目的

本研究は、長崎市をフィールドとして、修学旅行生を対象とした「被爆体験講話」の在り様および「長崎の証言の会」の足跡に焦点をあてたインタビューおよび資料調査を行うことで、その背後の社会的・政治的力学に着目しつつ、「証言」という特殊な原爆体験を意味づける語り(以下:原爆の語り)の形成と変化を明らかにする。また、核兵器廃絶研究センターで生まれつつある学生と被爆

者の交流の取り組みを事例として、「証言」という枠組みの今後の変容の可能性を探求する。

第二次世界大戦後70年を経た現在、直接の戦争体験者の語りを検討する機会は、今後急速に減少することが予想される。戦争体験者の語りとその「継承」をめぐる問題を、語りが生まれる現場において観察し、検討することは、喫緊の社会的課題といえる。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、(1)長崎平和推進協会、広島平和記念資料館等への「被爆体験講話」実施に関する資料調査および聞き取り調査、(2)長崎大学核兵器廃絶研究センターにおける学生による被爆者との交流の取り組みの参与観察、(3)「長崎の証言の会」の調査(資料調査および関係者への聞き取り調査)を行った。

(1) 被爆体験講話等の実施に関する調査

〔長崎市〕

長崎原爆資料館図書室にて、長崎平和推進協会の『長崎平和推進協会事業報告書』の資料調査を行ったほか、長崎市被爆継承課平和学習系の「語り継ぐ家族の被爆体験(家族証言者)」募集事業について、担当者に聞き取り調査を行った。

〔広島市〕

長崎の特徴を明確に提示するため、比較対象として同じく証言活動を盛んに行っている広島における証言活動の調査を行った。広島市立中央図書館や広島平和記念資料館の情報資料室において、財団法人広島平和文化センターの年次報告書『平和の推進』、『平和と交流』あるいは年史などの資料調査を行った。

(2) 学生と被爆者の交流の取り組み

長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)において、被爆者を招き、ラウンドテーブル方式でお茶を飲みつつ、双方向からの

コミュニケーションを前提に気軽に会話することを趣旨として、学生との交流の場を設け、参与観察を行った。

(3) 「長崎の証言の会」の調査およびデータベース化

「長崎の証言の会」の事務局長および旧来の会員の聞き取り調査を行ったほか、同会事務局において資料調査を実施し、研究協力者の助力を得つつ、主要資料である雑誌『長崎の証言』の目次のデータ化および「ニュース・通信」のPDF化を行った。このうち雑誌『長崎の証言』に関して、主な入力内容は、原稿タイトルおよび執筆者、掲載ページであるが、被爆者で原稿から情報が判明するものについては、被爆地と簡単な被爆の概要の入力も行っている。

4. 研究成果

(1) 被爆体験講話等の実施に関する調査

長崎市および広島市における実施状況を調査することで、修学旅行や平和学習などで被爆者を招いて行われる「被爆体験講話」が「証言」の代表的な形の一つとして主要な語りの場を形成しているということ、またこのシステムによって多くの人が被爆体験を直接聞くことができるというメリットがある一方で、切り取られた時間、日常から離れた空間で、様式化した一方行のコミュニケーションとなりがちであるという問題点を把握することができた。また、被爆経験のないものが原爆体験を語り継ぐ取り組みとして、近年広島市は「被爆体験者伝承事業」、長崎市は「語り継ぐ家族の被爆体験(家族証言)推進事業」を実施しているが、この被爆体験の「継承」を目指した取り組みにおいて、特に長崎市が「一人称で語る」という主観性を重視している状況が明らかとなった。

(2) 学生と被爆者の交流の取り組み

長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)において、被爆者を招いて学生との交

流の場を設けた。この後、学生が自主的に被爆者を訪問するなどの新たな交流も生まれ、従来の「被爆体験講話」とは異なる語り手と聞き手の双方向のコミュニケーションに基づく新たな原爆体験を語り継ぐ場を試験的に形成することができた。

上記(2)(3)により、原爆体験を語り継ぐうえで、被爆体験講話を中心とする「証言」という枠組みはどのような機能を果たしてきたのかを考察し、新たな原爆体験を語り継ぐ歴史実践の場を構築する可能性を示すことができた。

(3)「長崎の証言の会」の資料調査およびデータベース化

雑誌『長崎の証言』は、名称変更しつつ、約半世紀の間に72巻(2016年6月現在)が発行され、長崎独自の原爆体験の証言運動を牽引してきた。長崎には幾つかの代表的な被爆体験記集があるが、『長崎の証言』に集まる原稿の多様性と継続性は、ほかに類を見ないものである。『長崎の証言』は、長崎で最も大きな被爆体験の資料群の一つであるとともに、原爆に関する文学・芸術作品、平和教育教材、時評、時々の運動の展開やその感想、資料などの種々の原稿が掲載され、1960年代後半以降の様々な長崎の原爆被害、核にまつわる動きや市民運動をめぐる戦後史の貴重な資料群を形成している。

「長崎の証言の会」の協力を得て、雑誌『長崎の証言』については、1969年～2015年に発行された全72巻のうち、前記の項目について8393件の入力、「ニュース・通信」については、1970年～2015年に発行された全208号のPDF化を行い、『長崎の証言』データベースを完成させた。これらの研究成果を長崎の戦後史を繙くデータベースとして研究者および市民に広く活用してもらうため、長崎大学学術研究成果リポジトリNAOSITEに掲載し、インターネット上で公開している。

このうち、「長崎の証言の会」の「ニュース・通信」は、戦後の被爆に関する市民運動の実態を知るうえで貴重な資料であるが、このような会報の類は、資料の性質上、図書館での保管が難しく、被爆者の高齢化により戦後の市民運動を担ってきた団体の存続が危ぶまれる昨今、散逸が懸念されている。長崎市に戦後史の資料を保管する施設がないということは、地域社会的な課題となっているが、戦後の原爆に関わる市民活動が「歴史」となっていく中で、データという形ではあるが、大学という公的機関において保存・公開する道筋をつけることができたことは、広く社会的な意義を有するものである。

本研究においては、広島と比較して未だ成果の乏しい実証的な長崎の原爆の記憶と表象をめぐる一研究として、社会的に喫緊の課題である戦争体験の記憶の「継承」をめぐる問題の一端を示すことができた。別けても、『長崎の証言』データベースの完成は、散逸しつつある長崎の戦後史の資料の長期的な保存を実現するとともに、広く研究者および市民が資料を活用する足掛かりをすることで、原爆の記憶と表象をめぐる研究に、歴史学、社会学、人類学、文学などの諸領域を横断する学際的な足場を築くものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

・四條知恵、「被爆体験を語り継ぐ場」『RECNAニューズレター』Vol.3 No.3 2015年1月25日

http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/publication/newsletter_jp

・「被爆証言データベース化 長崎大研究員

団体誌の1000篇超 秋にも完成」『毎日新聞』2015年1月27日

・長崎大学核兵器廃絶研究センター市民データベース 長崎の証言

<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/datebase/inyou/testimony>

・長崎大学学術研究成果リポジトリNAOSITE 『長崎の証言』データベース

<http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/handle/10069/36218>

・四條知恵、「『長崎の証言』をデータベースに」『ナガサキ・ヒロシマ通信』207号 2015年11月15日

・「戦後史語る貴重な資料 『長崎の証言』データ化」『長崎新聞』2015年6月24日

・「ナガサキ平和リレー 被爆体験証言誌のデータベース公開」『毎日新聞』2016年6月9日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

四條 知恵 (SHIJO, Chie)

長崎大学・核兵器廃絶研究センター・

客員研究員

研究者番号：80730556